

十世紀時代の九族達韃

—蒙古人の蒙古地方の成立—

前田 直典

まへがき

1 王延徳の使高昌記にみえる九族達韃

2 Toquz tatar (九姓韃韃)を中心とした八・九世紀の Tatar (韃韃)

3 九族達韃を中心とした十世紀の阻卜 (韃韃)

むすび

まへがき

突厥族の勃興以來、蒙古高原を四世紀に亘つて統一、支配してきたチュルク人の勢力が九世紀中葉のウイグル族の潰走と共に大きな變化をみるに至つたことはアジャ北方史上に名高い事實である。この後、十三世紀の初頭に蒙古地方がチンギス汗を首長とする蒙古人によつて一統され、全く蒙古人の世界として、正しい意味での蒙古地方^{モンゴル・スタン}となつたことも亦世に

知られた事實である。この二つの事實の間に横たはるる三世紀半の年月の蒙古地方史は、大勢上からいへば、確かにチュルク人に代つて蒙古人の興隆する過程であるといへる。だが、かうした推移が如何にして行はれたか、いひかへればチンギス汗の汗國成立の背後にはどんな蒙古人の歴史があるのかといふことは、多くの學者の努力にもかかわらず、まだよくは解つてゐない。それも人種上、政治上のことさへが餘り明かでないのであつて、況んや社會、經濟、文化の状態に至つては殆ど全く知られてゐないといつてよい。

この時期の蒙古地方には諸族が割據してゐて、これらを統一した組織はチンギス汗の汗國の出現までなかつたらしく、十世紀に建國した契丹王朝もこれらの諸族を羈縻してゐた程度で、治下に完全に入れてゐたのではなかつた。この諸族のことは當時の漢字の記録に種々な文字で現れてゐるが、その内最も大きな勢力と思はれるものは、契丹王朝と金王朝の正史にみえるところでは阻卜或は阻鞞であり、宋王朝側の記録では韃韃であつた。そこで從來の研究者達も阻卜或は韃韃の

實體の究明に力を注いだものが多かつた。その人々に白鳥庫吉博士を初め松井等、箭内互、小野川秀美、王國維、王靜如、馮承鈞、徐炳昶などの名を擧げることができ⁽¹⁾る。その研究の結果、阻トと韃靼とは同じものらしく、蒙古人系の人種を中心として指した名稱らしいと考察されてきた⁽²⁾。だが韃靼とは蒙古人だけの名稱なのかとか、阻トとは何語なのかとかのより細かい問題となつても斷論をまだ得られず、この種族の本據、勢力或は來歴の如きは更に解決をみてゐないのである。

これらの問題を解明するのに最も有力な手掛りの一つとなるものがこゝに論じようとする九族達靼である。九族達靼といふ漢語は、現在のところでは、九八一《太平興國六》年に高昌に使した宋の使臣王延徳の行記だけにみえるものなのでが、それにもかゝはらず、今擧げた研究者の多くがこれをその論說の一基盤としてゐるのである。小野川氏が、從來一般に考へられてゐた唐宋に於ける「蒙古系統の韃靼」の西方移動を否定され、「唐の中期少くとも會昌年間より以後五代遼

宋に互つて、羌族に屬する韃靼が河西地方に居住し⁽³⁾てゐたと主張された如き、又松井氏が「阻トの本地は今の甘肅邊外」であると論ぜられ、箭内氏がこれに賛同された如き⁽³⁾、皆この九族達靼の解釋からきた結論なのである。だが、九族達靼を詳しく調べてみると、私はかうした諸氏の高論には同意できなくなつた。私は九族達靼とか阻トとかは漠北のオルホン河流域を本據としてゐた蒙古系の種族であると考へざるを得なくなつた。そしてかう解釋すると九世紀中葉頃と十二・三世紀頃との蒙古系の部族の互の連絡がよくつけ得ると思ふのである。以下私はこれについて、述べたいが、紙數の關係上、この中、十世紀を中心とし、更にその前世紀との關係を主として論じた。十二・三世紀の蒙古系諸部族との關係については別稿で論じることとしたのである。

一 王延徳の使高昌記にみえる 九族達靼

王延徳の行記は宋史^{卷四}高昌傳や文獻通考^{卷三}車師前後王

傳に引用され、又王明清の揮塵前錄四卷にも收められてゐるが、これらには若干の相違があるので、今、王國維がこれらを校合して作つた王延德使高昌記校録によつて、論述に必要とする部分を次に記してみる。

初自夏州、歷玉亭鎮、次歷黃羊平、其地平而產黃羊、渡沙磧、無水、行人皆載水、凡二日、至都囉囉族、漢使過者遺以財產、謂之打當、(王國維略)、次歷茅女王明清揮塵前錄引作家、子族、族臨黃河、以羊皮爲囊、吹氣實之、浮於水、或以橐駝牽木筏而渡、次歷茅女王子開道族、行人入六集沙、沙深三尺、馬不能行、行者皆乘橐駝、不育五穀、沙中生草名登相、收之以食、次歷樓子山、無居人、行沙磧中、以日爲占、且則背日、暮則向日、日中則止、夕行、望月亦如之、次歷臥羊羊字據揮塵前錄補、梁劾特族、地有都督山、唐回鶻之地、次歷大蟲太子族、族接契丹界、人尙衣錦繡、器用金銀、馬乳釀酒、飲之亦醉、次歷屋地因揮塵前錄補、族、蓋達于于越王子之子也、次至達于于越王子族、此九族達韃韃中尤尊者、此九字據揮塵前錄補、次歷拽利王子族、有合羅川、唐回鶻公主

所居之地、城基尙在、有湯泉池、傳曰、契丹舊爲回紇牧羊、達韃舊爲回紇牧牛、回紇徙甘州、契丹達韃遂各爭長、攻戰、此廿三字據揮塵前錄補、次歷阿墩族、經馬驤山望鄉嶺、嶺上石龕有李陵題字處、次歷格囉美源、西方百川所會、極望無際、鷗鷺鳬雁之類甚衆、次至托邊城、亦名李僕射城、城中首領號通天王、次歷小石州、次歷伊州、

九八一(太平興國六)年五月に京師を出發した王延德は、彼の行記の中のこゝには引用しなかつた部分に記してゐるやうに、翌九八二(太平興國七)年四月に高昌即ち今のトルファンの地に達したのだが、その中間で彼の通過したのがこゝに引用した夏州即ち今日の陝西省の北邊の横山縣附近から伊州即ち今日のハミ附近に至る道筋である。これが如何なるコースであるかを調べてみよう。

右に引用した行記によると、夏州を發した延德は玉亭鎮、黃羊平を経、沙漠を渡ること二日にして都囉囉族のところに至り、更に茅女鴨子族を経て、黃河を渡つてゐる。玉亭鎮は續資治通鑑長編には玉庭鎮とあるが、九八七(雍熙四)年知

夏州の安守中が李繼遷と戦つて敗績した地の玉亭鎮⁽⁶⁵⁾、九九一
〔淳化二〕年夏州の趙保忠がこの繼遷を襲撃した地の玉庭鎮⁽⁶⁶⁾は
共にこれと同一のところで、安守中のこゝで敗北した際には
夏州の城門迄繼遷に追撃を受けたのだから、夏州の近くであ
ることは間違ひない。都囉囉族は小野川氏が指摘されたやう
に宋史^{卷四}吐蕃傳に

〔淳化五年〕是年春、知西涼府左廂押蕃落副使折迪諭龍
波、振武軍都囉族大首領世來貢馬。

とある都囉族にあたろう。右の記事によると、この部族は九
九四年頃には振武軍方面、即ち今日の陝西の綏德以北から綏
遠省の南部にかけての地、の一部にゐたことになり、これを
前記の、沙漠を通つた後、黄河に出る前にこの部族に會つた
といふ王延徳の行記に照し合せると、都囉囉⁷部囉族は大體
今月のオルドス地方の中部以北にゐたものと考へられる。少
くとも振武軍に屬してゐる以上は夏州よりも西方にゐた部族
でないことは確かである。してみると王延徳は夏州からオル
ドスを北行して黄河に出たものだとみることが穩當だらう。

元和郡縣圖志^{卷四}によると元和年間には夏州から黄河の北の
豐州の天德軍に至る驛路が置かれてゐて、夏州からオルドス
を北行するのは唐代以來普通のことだつたと思はれる。

黄河に出た王延徳は、河の手前で茅女嗚子族に會ひ、河を
渡つてからは茅女王子開道族に出會つてゐる。この茅女王子
開道族の茅女は茅女嗚子族の茅女と同じもので、大きな部族
名を示し、王子開道とか嗚子とかはその中の小部族名だら
う。オルドスの北部で、黄河を挟んで居住してゐた茅女族
は、宋時代の古豐州、即ち唐代の豐州で今日の五原方面、に
ゐた言泥⁷兀泥族と音の上からも類似してゐることはない。言
泥族はその内部は三族以上に別れてゐたことが宋史^{卷四}黨項
傳などから知られる。

王延徳は黄河を越へ、茅女族の地を経てから、再び可成長
い間沙漠を進んだらしい。その記事中に『沙磧中を行くに太
陽を以て目標とし、朝は太陽を背にし、暮には太陽に向ひ、
太陽が中天にくると止つた。夜行には月を望見すること太陽
の場合と同じであつた』と記してゐるところをみると、彼は

沙漠を西北に進んだものと考へられる。沙漠を越へた彼は臥羊梁刻特族の地に着いた。彼はこの地に都督山があり、唐の回鶻の地だと記してゐる。唐の回鶻の地といへば、普通に考へれば、ウイグル汗國の首邑ハラ・バルガスの所在するオルホン河流域を中心とした地方である。もしさうだとすれば、都督山はウイグルや突厥が牙を建てた名高い烏德鞬山を想起させる。烏德鞬山、チュルク語の *Udiken yiz* は於都斤山、都斤山、尉都健（都尉健）山、鬱督軍山などとも書かれるが、この漢字の字面や音の類似から王延徳は漢人流に都督山と記したのではなからうか。

王延徳は次に大蟲太子族、屋地因族、達干于越王子族を経て、拽利王子族の地に至つてゐる。この族の條に王延徳は『合羅川がある。唐の回鶻公主所居の地で、城基が尙ある。湯泉池がある』と記してゐる。松井氏を始め従來の諸研究者はこの合羅川を黒水の義で、今日のエチナ河（張拔河）だと考へ、これを、王延徳が夏州から西方に向ひ、今のエチナ河を経て、今日のハミ附近に至つたといふ説の最大の根據とし

てゐる。又その結果、松井氏や田坂興道氏のやうに唐の回鶻公主城、所謂可敦城をエチナ河邊に求める説も生じたのである。しかしこれは正しいだらうか。

合羅川といふ地名は、既に指摘されてゐるやうに、會昌一品集六卷の「與黠戛斯可汗書」に「又聞、合羅川回鶻牙帳未盡毀除」とみえ、同集八卷の「代劉沔與回鶻宰相書意」に「紇圻斯（キルギス）即移就合羅川、居回鶻舊國」とある合羅川と同じものである。會昌一品集の後者の書のこととは資治通鑑四六二にも八四二（會昌二）年の條にみえてゐるが、ウイグルを破つて間もないキルギスが、ウイグルの舊地を占領してゐたことを語るもので、これ亦普通に考へれば、回鶻の舊國はオルホン流域附近とみて差支へない。小野川氏のやうに「回鶻の牙帳は漠北を逐はれて略中〔河西の〕合羅川に假に移つてゐて、紇圻斯は此の地に就き回鶻の舊國を領有したの」（10）だとするのは、ウイグルの本據がオルホン流域であり、キルギスがこの地を攻めたことは疑ひない事實である以上は、持つて廻つた考へ方である。合羅川をわざ／＼エチナ河

迄持つて行く必要は少しもないのである。考へてみると、松井氏や田坂氏が公主城をエチナ河邊に求められたのも謂れないことであつて、唐からウイグルの可汗に嫁した公主を、理由もないのに、可汗の居城から恐ろしく離れた沙漠の一地におく筈はなく、ハトンたる唐の公主の居城を別に築いたにしても、それは原則として可汗の居地の近くにあるべきで、少くともウイグルの本據の地内にあるべきである。田坂氏はエチナ河邊の公主城は太和公主の居城だとされてゐるが、⁽¹⁰⁾舊・新兩唐書などによると、太和公主はキルギスがウイグルを破つた時、その手に落ちたとみえ、又、同書に後にキルギスからウイグルの烏介可汗に奪ひかへされたことを記して、烏介可汗は「却⁽¹¹⁾〔公〕主、南度磧、邊人大恐、進攻天德城⁽¹²⁾」としてゐるところをみると、太和公主の居城は天德城より北の漠北で、しかもウイグルの本地内にあつて、西方エチナ方面にはなかつたと考へられる。

合羅川のことは宋代の記録にも九八七（雍熙四）年に「合羅川回鶻第四族首領遣使朝貢⁽¹³⁾」とみえてゐるが、この合羅川

回鶻は、ウイグル潰散後、オルホン河方面に僅かに残存してゐたウイグルを指すもので、遼史のいふ回鶻單手國がこれに當らう。一體合羅即ち蒙古語の *Khara* を以て名付けられた地名は蒙古に甚だ多いのであつて、この合羅川も今日の何處に當るかは的確にはいへない。しかし例へば、今日トラ河の北方から發して西北流し、オルホン河に流れ入つてゐるハラ河の地域に合羅川を當てるよりも、ウゲイノールから西流してオルホン河に入るハラ河地域にみた方がまだよい。或は元史百官志や地理志などにいふ哈刺和林河 (*khara xorum nuireu*) や元朝の漠北の主邑 *khara xorum* 市を含む地域に合羅川を當てられないこともないが、⁽¹⁴⁾今はこの考へはとらない。もしウゲイノールのハラ河地域が合羅川だとすると、田坂氏が比定してゐるやうに、唐の公主城の一で、遼代に鎮州可敦城といはれた城址がこのウゲイノールの西にあるから、王延徳のいふ「有合羅川、唐回鶻公主所居之地、城基尙存」ともよく符合するわけである。

王延徳は又この地に溫泉池があつたことを記してゐるが、

杭愛山脈からオルホン河流域方面に溫泉が幾つかあることは蒙古游牧記や水道提綱にもみえるところで、スミルノフの「外蒙古の溫泉と礦泉」にその調査の結果が記されてゐるが、又旅行家の記述によれば元朝の和林の地であるエルデニ・ズウの北にも南にも古代建造物の跡のある溫泉があるところをみる^(14a)ど、オルホン流域の合羅川附近に溫泉があつたといつても不思議ではない。かうした合羅川のオルホン流域説を主張する助けとなるものは王延徳の行記のこの後の部分にもある。王延徳が拽利王子族の次に訪れたのは阿墩族で、彼はこの部族を過ぎて後、「馬驢山、望郷嶺を經、^{略中}次に格羅美源を歴

た。こゝは西方百川の會するところで、極望際りなく、鷗鷺鳥雁の類が甚だ衆かつた」と記してゐる。今日エチナ河流域からハミに至る道は隊商が通り、一時は新綏汽車会社の自動車も往復してゐたが、これを調べてみると、西方百川の會するところなどといふ水源地はないといつた方がよい。かうした水源は、湖水や河源の分布状態からみて、矢張杭愛や阿爾泰の西に求めた方が可能性が多い。(馬驢山は舊唐書^{卷一廻}九五一廻

紀傳にみえる貞觀の初にウイグルの菩薩が突厥の欲谷設の兵を破つた漠北の馬鬣山を想起させるが、同一かどうかは確かでない)。

つまり王延徳の夏州から伊州迄の行程は、從來考へられてゐたやうにエチナ河を經由したのではなく、オルドスを北行し、唐代の豐州の南附近で黄河を渡り、更に西北行してオルホン流域地帯に出で、こゝで達靺の諸部族を次々に訪れた後、杭愛を越へて今日の巴里坤方面に出て、伊州即ちハミに達したのだと私はみたいのである。

考へてみると、唐代の豐州附近の中受降城からオルホン流域に出る道は唐時代にウイグルと唐とを結ぶ大道であつた。賈耽の道里記にみえる「中受降城入回鶻道」がこれである。⁽¹⁵⁾又唐の天寶末年に關隴の地が吐蕃に没して以來安西、北庭方面から唐への連絡は、北庭即ち今日の新疆省の孚遠縣附近から東或は東北に向ひ、オルホン流域のウイグルの地に出で、更に東南下してきたのである。^(16a)元和郡縣圖志にいふ迴鶻路がこれであるかもしれぬ。^(16b)前者は十三・四世紀時代に華北と和林

との連絡路であつた二驛路の内の木鄰道のコースを、後者は十三世紀に長春真人が歩んだオルホン河からビシバリツクへの道を想起させる。甘肅を通過する道をとまなかつた王延徳はオルドスを北上して、唐の豊州附近から、當時尙よく知られてゐた筈のこの「中受降城入回鶻道」に入つて、オルホン流域に出て、更に廻鶻路を西南に進み、巴里坤附近に達し、こゝから北庭の方へは行かずに南に下つてハミ附近に出たものであらう。この道は、唐代以來使用されてゐた東西交通路であつたからばかりでなく、後項に述べるやうに政治上、軍事上の必要から達靺に特に連絡するためもあつて、王延徳の取るコースとなつたものに相違ない。

それでは王延徳の記してゐる九族達靺はこのコースのどの邊にゐたのだらうか。小野川氏や箭内氏は九族達靺を都囉囉族、茅女喝子族、茅女王子開道族、臥梁剌特族、大蟲太子族、屋地因族、達于于越王子族、拽利王子族、阿墩族であるとしてゐるが、これは誤りであらう。王延徳の記述では達于于越王子族の條下に「此九族達靺尤尊者」と書いてあるの

と、屋地因族の條下に「蓋達于于越王子之子」とあるのとでこの二族が達靺に属することは確かであるが、他の部族が達靺なのかさうでないのかは少しも記されてゐない。それ故、小野川氏が右の二部族以外の部族を何の吟味もなく、全部九族達靺だと考へ、その名稱に黨項の部族の名と同じやうなものがあるから、九族達靺の中に黨項種があるといひ、更には河西の達靺は羌族系だと説かれたのは早合點すぎた。(18b) 實は王延徳が黃河北方の沙漠に出る迄に出會つた部族、即ち都囉囉、茅女喝子、茅女王子開道の三族は達靺には屬さぬものである。都囉囉族が羌族であることは小野川氏も述べられが、茅女の二族が黨項であることは、この頃この附近は黨項の住地であつたこと(19)、茅女族を言泥族に比定できないこともないと思へるからである。しかしこれらは羌族であつても、もともと達靺には屬さないのだから、達靺に羌族系のある證據にはならない。

私がオルホン流域方面にゐたと推測した大蟲太子族や拽利王子族をも小野川氏は羌族であるとして、涇原路即ち今日の

甘肅の東部附近の羌族の大蟲族と野利族に比定されてゐるが、⁽¹⁸⁾これは名稱の類似だけであつて、私には賛成できない。

なんとすれば、羌族の大蟲、野利二族の十世紀時代の住地は大蟲太子族らの住してゐたオルホン流域とはまるで異つた地方にあつたからである。よしんば私の説をとらずに從來の如く合羅川をエチナ河邊と考へた場合でも、涇原の野利族と合羅川の拽利王子族とは間が餘りにも離れすぎる。實際拽利は契丹の耶律にだつて同音だとすることができるのであつて、これを以て羌族の野利だと斷言することは到底できない。又、大蟲太子族は王延徳によれば契丹と界を接してゐたとあるが、契丹の勢力は當時陰山附近では今日の綏遠から五原の間で黨項と戦つてをり、漠北ではオルホン河、ケルレン河方面で阻と戦ひかけてゐたのであるから、この族の住地をオルホン方面に求め得ても、涇原路方面には比定すべきでなく、したがつてこの族を阻ト即ち達斡とみ得ても、羌族の大蟲族とに別なものとみななければならない。

小野川氏の十世紀の達斡に黨項系のものがあつたとする説

には今一つ、黨項人と考へられる折文通なる男が冊府元龜朝貢の部の一個所に達怛都督折文通とあることが證據となつてゐる。しかし達怛都督に折文通がなつてゐたのだとしても、これは彼が達怛人であり、達怛に黨項系のものであるのだといふ根據にはならない。それは、ウイグル人である晁浚斯⁽²⁰⁾李思忠は河西黨項都將に任じられたが、これから晁浚斯は黨項人であるとは決していひ得ず、又、黨項の中にはウイグル系のものがあつたともいひ得ないと同様である。おそらく折文通は達怛の近くに住してゐたか、或は部下の一部に達怛人を入れてゐたから、達怛都督の官號を稱したのだらう。要するに小野川氏の九族達斡は羌族系であるとする考へは論據薄弱で成立し難く、我々は、舊新五代史や冊府元龜などの十世紀時代を記録した部分に達斡と黨項とが普通明かに區別されてゐるやうに、矢張り互に別種なものとみた方が妥當であると思ふ。

王延徳の記してゐる九族達斡には達干于越王子族と屋地因族の他、如何なるものがあつたかといふと、私は王延徳が沙

漠を越へて出會つた臥羊梁剌特族はその一つであると思ふ、この部族の名稱が Uriangrud に近い音をもち、蒙古語らしいことがこの推測を確めてくれる。この他オルホン河流域に、上記の三部族と隣合つて住んでゐた大蟲太子族、拽利王子族も九族達紐の一であつたと考へる。後項に引用し説明する遼史太祖本紀の天贊三年の記事にみるやうに、この頃のオルホン流域の地には阻トが據つてゐたことを遼史は傳へてゐるし、烏德鞬山 (utiken yis) の地は十一世紀には「Tatar 人達のステツプとなつてゐた」ことを Mahmud al-Kasghari は傳へてゐる。⁽²¹⁾ 我々は、從來の研究によつて、阻トが韃靼であり、韃靼は Tatar に當ることを知つてゐる。それでは十世紀を中心とした時代にオルホン河、ユトゥケン山の地方に住んでゐた達紐 = Tatar = 阻トは如何なる來歴をもつものだらうか。

二 Toquz tatar (九姓韃靼) を 中心とした八・九世紀の Tatar (韃靼)

九族達紐といふ漢語は王延德がその部族中を通過した時、原語か或は通譯の言葉によつて實際に耳にしたところを、漢字を以て表現したものだらう。九族といふ言葉は暫くおいて、達紐だけをとりあげてみると、この語は韃靼、塔坦、達紐、達達などと種々に書かれてゐるものと同一對象を指す語字だが、かう文字が一定してゐないのは、確かに外來語だからであつて、その原語を Tatar であると一般に考へられてゐるのは正しい。⁽²²⁾ 十三世紀の東方の文獻では、當時の漢蒙辭書に達達は蒙古としてあるやうに、Mongγul の漢譯が韃靼、達達である場合が多く、⁽²²⁾ 西方の文獻では、ラシイドやマルコ・ポーロにみるやうに、Mongγul を指すのに Tatar や Tartar を使ふことが多い。しかし蒙古人自身が蒙古人の總稱として使つた言葉は、十三世紀にあつては、Mongγul であつて、當時の蒙古語の Tatar は蒙古人の一部族の名稱であることは周知の事實だらう。Mongγul が蒙古人自身の總稱となつたのはモンゴル部のチンギス汗が蒙古人を一統してからのことであつて、それ以前の時期には Mongγul 以外の言葉が總稱で

あるべき筈である。後代の蒙古人の歴史記述者はこの言葉を *belo ulus* だといふものもある。⁽²³⁾「我らが國」とか「我らが國人」と和譯できるこの言葉を以て蒙古人の古稱としなければならなかつたところを見ると、蒙古人全體を總轄する言葉はモンゴル部制覇以前の蒙古人自身にはなかつたのかもしれない。⁽²⁴⁾

この *Mongru* に比べて韃靼や *Tatar* は、多くの部族の總稱としては、もつと古い歴史をもつ言葉であるが、古い時代のそれも十三世紀の場合と同様に蒙古人或はこれに近い種族を總稱するチュルク語や漢語であつたと解して大過はあるまい。⁽²⁴⁾チュルク人の間で「*Tatar*」といふ言葉の使はれてゐるのは、チュルク人自身の記録として現在のところ最古のものとみられてゐる、突厥碑文に迄遡る。それ故、八世紀かそれ以前に既にこの言葉がチュルク人の間にあつたことは確かである。

突厥碑文中、キユル・テギン碑にみえる「*Tatar*」は次の如くである。⁽²⁵⁾

1 弔ふ者、歎く者、前方日出づる處より？？ (*bo'kiti*) の
州國、唐、吐蕃、波斯、拂菻、キルギス、三姓骨利幹、
三十姓タタル (*toquz tatar*)、契丹、奚、かゝる民來り
て、歎きぬ、弔ひぬ。

2 南には唐の民敵なりき。北にはバズ可汗、九姓鐵勒の
民敵なりき。キルギス、骨利幹、三十姓タタル、契丹、
奚、總て敵なりき。

3 三十姓タタル……九姓鐵勒の貴人ら、人民、このわが
言葉をよく聞け。

この中、1と同文はビルゲ可汗碑にも記されてをり、2と3もこの可汗碑の缺文中に同様なものがあつたらしく思はれる。⁽²⁵⁾ビルゲ可汗碑にはこの他次のやうな「*Tatar*」がみえてゐる。

4 鐵勒の民、九姓タタル (*toquz tatar*) と會して來り。
アグにて一大戰、われ戰へり。

我々は1と2から *toquz tatar* (三十姓タタル) はキルギス、骨利幹と契丹、奚との間に所在してゐたことをみて、その住

地を、バイカル湖の東岸方面の骨利幹とシラムーレン河邊の契丹との中間に求めることができる。即ち、ケルレン河中流下流、エルグネ河、オノン河、シルカ河方面をその住地としても大過はあるまい。三十姓といふ多數の部族に内部が分れてゐるところをみると、この Tatar は大きな集團であつて、相當廣い地域を占めてゐたと思はれる。次に 4 によると、*quz tatar* (九姓タタル) と *4 Tatar* の集團が *Oguz* (鐵勒) の近くにゐたことを知るが、この *toquz tatar* の位置をよりよく示す記録は *Shensu* 碑文と稱されるウイグル王葛勒可汗の碑である。この碑文の現在解讀できる部分には *quz tatar* の文字が三個所に現れてゐるが、その中、住地の關係を最もよく示してゐるのは次の記載である。⁽²⁶⁾

そこに *ブエケグ* にわれ着けり。夜、光沈みゆきし時われ戦へり。そこにわれ勝てり。(中略) *ブエケグ* に八姓鐵勒 (*sekitz oguz*)、九姓タタル (*toquz tatar*) 留らざりき。第二日に太陽登りてわれ戦へり。(中略) そこにてわれ勝てり。(中略) 追ひて汝來れとわれ云へり。

すてゝわれ行けり。彼來らざりき。更にわれ追撃せり。ブルグにわれ着けり。四月九日にわれ戦へり。われ勝てり。その馬群、その家畜、その娘、その女をわれ齎したり。五月、追ひて彼來れり。八姓鐵勒、九姓タタル留らずして來れり。セレンゲ (*Selenge*) の西、ユルン・コルの南、更には? シップ・バシユに迄兵われ置きたり。ケルグ、サクシユ、シップ・バシユより進みて彼來れり。……者セレンゲに迄兵布けり。五月二十九日にわれ戦へり。そこにわれ勝てり。セレンゲに壓してわれ勝てり。(中略) その多くセレンゲ下流に逃れたり。われセレンゲ過ぎりて追ひ行けり。(中略) 八月二日にチウダルトウル湖にカスイを通りてわれ戦へり。そこにわれ勝てり。そこに追ひてわれ行けり。その月十五日にケイレ・バシユ、ユチ・ビルクニにてタタルと共にわれ激戦せり。その一部の民降れり。その一部の民……に來れり。そこに再びわれ休めり。烏德隄 (*Udiken*) の界にてわれ冬もりせり。敵より救ひ、われ救へり。

この記事は八世紀の中葉、葛勒可汗が Tatar を討つた事蹟を刻したものだ、この征討の結果葛勒可汗は彼の汗國を確立することができたのである。この文中には種々な地名がみえてゐるけれども、正確に位置の推定できるのは *seleuge* 即ち今日のセレンゲ河だけである。しかし碑文のこの地名からだけでも *toquz tatar* はセレンゲ河の下流近くにゐたことが知られる。先きのビルゲ可汗の碑にみえる、この Tatar と聯合して突厥と戦つた *Oguz* は、從來九姓鐵勒のことだとみられてゐるが、この碑文中にみえる Tatar と合してウイグルと戦つた *seliz oguz* (八姓鐵勒) も、突厥碑文の *ögüz* の場合のやうに、^(27a) 九姓鐵勒の一部を指すものであつて、*toquz oguz* (九姓鐵勒) からウイグルの一姓を去つた残りがそれだとみる人もある。^(27b) 九姓鐵勒の住地は、舊・新唐書、通典或は突厥碑文などから、セレンゲ河及びその東方オルホン河、トラ河、ケルレン河上流にかけてであると推察される。^(27b) してみるとこれと聯合した *toquz tatar* (九姓タタル) もセレンゲ河の下流か、その東方にゐたと考へてよく、又さうで

あれば、先に述べた三十姓 *tatar* の住地とも相連つてゐることになつて都合がよい。G. J. Ramstedt が右の文中の *ynl*・*ynl* (*ynl göl*) を、*göl* が蒙古語の *ynl* にみられるところから、ケルレン河の源流の一である *Dailun* 河に、^(28a) *ynl*・*ynl* (*ynl göl*) を庫倫の北西の一河に、^(28a) 一應比定してみてもゐるのも若干参考になる。王國維がオルホン碑文の *toquz tatar* の住地を、オルホン流域と綏遠地方との中間にあつたと思はれる唐代の達旦泊附近に求めてゐるのは何ら根據のない比定であつて、それは彼がシネ・ウス碑文のこの記事を知らなかつたために冒した誤りであらう。

八世紀頃のことを記した漢語史料には韃靼のやうな Tatar に比定できる語字はない。その代り今述べた三十姓 *tatar* の住地と思はれる地方には室韋の一種がゐたことになつてゐる。これはこの Tatar を漢人は室韋に含めてよんだのだとするのが學界の通説になつてゐるが、王靜如は更に進んで「隨唐の九部室韋」も *toquz tatar* であると考へた。^(30a) 九部室韋とは隨書^{卷八} 契丹傳附傳の室韋にみえる北室韋を指すもの

であらうが、小野川氏もいふやうに、王靜如の比定にはまだ疑問の點が多い。^(80b)韃靼の名稱が始めて漢籍にみえるのは九世紀中葉頃からである。前に引用した會昌一品集の「代劉沔與回鶻宰相書意」に、

紇圻斯即移就合羅川、居回鶻舊國、兼以得安西、北庭、達怛等五部落、

とあり、同書^{五卷}「賜回鶻嗚沒斯特勤等詔書」に、

秋熟、卿及部下諸官並左相阿波兀等部落、黑車子、達怛

等平安好。^(左相、文苑英華卷四、六八所收詔書作有相)

とあるのを以て王國維は「是爲韃靼見於漢籍之始、時唐武宗會昌二年也」としてゐる。これ以後、韃靼に類似した語字は唐末、五代にかけて屢々記録にみえてくる。この現象は、ウイグル族の潰散と共に漠北の諸部族の動きが唐王朝の新たな問題となり、注意がそこに向けられた結果、ウイグルやキルギスによつて、彼らの「Tatar」と呼ぶ隣部のことがその名稱と共に傳へられ、唐人によく知られてきたことに起因しやう。更に唐末五代になつてはこの「Tatar」が南下し、國境に

近附いたことがその屢々記録される原因となつたとみてよい。

ウイグル汗國時代を通じての「Tatar」の位置は、明確にはいへぬが、大體前述した八世紀中葉の狀態と大差はなかつたらう。ウイグル汗國を瓦解させたキルギスに對しては、右にあげた會昌一品集の文にみる如く、「Tatar」達怛が若干の交渉をもつた筈であるが、詳細は解らない。しかし白鳥博士や王國維のやうにこの頃黑車子室韋の南下があつたと考へるならば、⁽³¹⁾右の「賜回鶻嗚沒斯特勤等詔書」中にもこの部族と共に書かれてゐる達怛は同じ動きをもつたものと思はれ、又、この後大中二（八四八）年頃にはキルギスと室韋とが戦つてゐるが、これと同様な現象がキルギスと達怛との間にもあり得た筈である。更にいへば、この頃はまだ室韋と達怛との區別が唐人に明かでなく、室韋と記してゐるものゝ中に達怛も含んでゐる可能性が十分ある。

ウイグルの舊地オルホン流域を占領したキルギスは八四七（大中元）年には、ウイグルの舊例の如く、唐の冊命を可汗

が受けたが、八六六(咸通七)年頃になると、將軍らを送つて冊命を唐に請ふても與へられず、この後、新唐書一七黠戛斯傳によると、「卒不能取回鶻後之朝聘冊命、史臣失傳」とある。かうした情勢は一つにはキルギスの勢力が弱化したことを物語るものである。これに反してこの頃から達怛は蒙古地方の強部として唐人に關係をもつてくる。資治通鑑九二唐懿宗紀や五代史四七達靼傳によると達靼は八六八(咸通九)年には唐朝の請により沙陀、吐谷渾らと共に麗助を討つてゐるが、更に八八〇(廣明元)年には後の後唐王朝の設立者李克用父子がこの達靼を頼つて支那から逃れてきて、八八一(中和元)年には彼と共に達靼兵万人は支那に赴き、まもなく長安から黃巢を逐ひ拂つてゐる。

かうした達怛を會つての三十姓 ^(32b) 或九姓 ^(32c) がウイグルの潰散後南下してきて、キルギスと争ひ、九世紀後半にはそれを壓して、蒙古地方に擴がつたものとみるのが大勢上妥當なのではあるまいか。此項で説明するやうに、十世紀の二十年代にオルホン流域を占めてゐるのは確かに、キル

ギスではなく、阻卜即ち韃靼であるが、それは既にこの九世紀後半の時代にもたらされた現象であらう。資治通鑑の胡三省の註に引用された、宋初の人宋白の記した達靼の説明には達靼者本東北方之夷、蓋靺鞨之部也。貞元元和之後、奚・契丹漸盛、多爲攻劫、部衆分散、或投屬契丹、或依于勃海、漸流徙于陰山、其俗語訛、因謂之達靼、唐咸通末、有首領每相溫・于越相溫、部帳于漠南、隨草畜牧、李克用爲吐渾所困、嘗往依焉、

とあるが、宋白が、達靼を契丹・奚の攻劫のために部衆が分散し、陰山に流徙したものだとしてゐるのは、達靼といふ言葉を語源の解らぬところから靺鞨の訛音と考へた結果、契丹に攻劫された靺鞨と唐末陰山方面に首を出した達靼とを混同したために起つた誤解である。それには又唐末以來漠北の情勢がよく解つてゐず、更に宋白自身が現前の宋初の契丹の盛んな勢に眩惑されたことも原因となつてゐよう。もし咸通頃から支那の北邊に姿を現した達靼が敗殘流徙の部族であるとしたならば、李克用父子がこれに頼つて勢力を恢復し、後唐

王朝を立てたことも困難であつたらうし、後唐國が立つてからは頗繁に達靼と後唐との間に使節の往來があつたことも奇異な現象であると考へねばならなくなる。私は思ふに、李克用の頼つた達靼、後唐國と使節を往來させた達靼は、キルギスの後にオルホン流域を占めた達靼か、或はケルレン河流域のそれであつて、長城附近に現れたものはそれら達靼の一支部にしか過ぎぬであらう。

先きに私は otuz tatar (三十姓達靼) がケルレン下流、エルグネ河、シルカ河方面にをり、 toquz tatar (九姓達靼) がこの西方からセレンゲ河の東にかけて住んでゐたことを述べたが、三十姓達靼は三十の諸部が聯合して組織してゐた一つの部族集團であるとみるよりも、三十部にも及ぶ程多數の同種の小部族が政治的統一を殆ど果たさずにゐたものを總稱したのだといふことが隋書や唐書の室韋の記書から判斷される。これに對して九姓達靼は類を異にする。前にみたやうに、突厥もウイグルもこの Tatar と激戦してゐるが、それはその住地が彼らに接近してゐたからばかりではなく、突厥や九姓

鐵勒との接觸によつて文化的にも Tatar 中で最も早く開け、九つの部族からなる可成強固な部族聯合體となつてゐたからであらう。九世紀の後半にキルギスを逐つてオルホン流域に入つた達靼は、住地の上から或は勢力の上から考へても、この九姓達靼であるに相違なく、だからこそ十世紀にオルホン流域の達靼を訪れた王延德はその達靼を九族達靼と記し、又契丹の記録にも十一世紀初頭同地方にゐたと推される達旦を達旦國九部とも書いてゐるのである。⁽³⁴⁾ 匈奴以來漠北の中心地であつたオルホン流域に入つた九姓(九族)達靼は曾てと同様矢張達靼中での最強のものであつたことは次項に述べることも知られようが、この九姓達靼の南下した舊住地には三十姓達靼の一部に入り、三十姓達靼の別部はケルレン下流から、從來八姓鐵勒 (yoliz otuz) の住地であつたケルレン上流へも移動したと思はれる。八姓鐵勒は南下する九姓達靼におされて西南方に移動し、オルホン流域を越へて杭愛、阿爾臺方面に移り、ここに住して、後に乃蠻 (nayman) 即ち蒙古語で八姓或は八部とよばれるものになつたのだと私は思

ふ。

三 九族遼朝を中心とした十世

紀の阻ト《遼朝》

十世紀の初期に建國した契丹の阿保機の王國は九一六〔神冊元〕年には華北の北部から陰山方面まで征して多くの戦果を得たが、この結果、翌年二月になつて遼史に「阻ト來貢」と「達旦國來聘」の記事が現れる。これは共に同一事實を指すもので、たゞ原史料が契丹系のものには阻トとあり、漢人系のものには達旦とあつたため、遼史の編者がそれぞれ別なものと誤解して併記したに相違ない。阿保機の契丹王國はこの頃から達旦¹¹阻トの勢力と十分な交渉をもち始めたのである。この後九二四〔天贊三〕年になると、阿保機は大舉して西北に進撃するが、この親征を遼史^二太祖本紀は次の如く傳へてゐる。

〔天贊三年六月〕大舉征吐渾・黨項・阻ト等部、詔皇太子監國、……八月乙酉、至烏孤山、以鵠祭天、甲午、次單

于國、登阿里典壓得斯山、以麋鹿祭、九月丙申朔、次古回鶻城、勒石、紀功、庚子、拜日于歸林。丙午、遣騎攻阻ト、……甲子、詔礪闕遏可汗故碑、以契丹・突厥・漢字紀其功。……〔十月〕丁卯、軍于霸離思山、遣兵、踰流沙、拔浮圖城、盡取西鄙諸部、

こゝに記された古回鶻城は、田坂氏が比定したやうに、遼史の他の部分にみえる回鶻軍于城、ト古罕城、窩魯朶城に當り、オルホン流域のハラ・バルガスン城趾がこれである。⁽³⁵⁾ 關遏可汗故碑は、松井氏もいはれたやうに、オルホン河畔所在の突厥王毗伽可汗碑を指すものであらう。してみると阿保機の軍は九二四年の九月にはオルホン流域にゐたわけであるが、この地で彼らが戦つたのは、右の遼史の文によれば、明かに阻トである。つまりオルホン流域の地はこの頃既に阻トに占められてゐたと考へてよい。遼史ではウイグルやキルギスを阻トといふ文字で表はすことはなく、この場合の阻トも屢々いふ遼朝の契丹名であるとみて何ら差支へない。このことを裏書するのが舊五代史^三後唐莊宗紀の同光三〔九二

(五) 年の條にみえる次の記録である。

六月癸亥、雲州上言、去年契丹從磧北歸帳、達靺因相掩擊、其首領于越(統編本改作稽悅)族帳自磧北、以部族羊馬三萬來降、已到南界、今差使人來、赴關奏事、

先きの遼史の文によれば阿保機が大舉して征したのは吐渾、黨項、阻卜等部となつてゐるが、吐渾と黨項の兩族は當時長城沿邊にゐて、漠北^{II}磧北にゐなかつたことは確かだから、漠北で阿保機が戰つたのは、オルホン流域の例でみるやうに、阻卜である。ところがこの舊五代史の文は去年即ち九二四年に漠北で契丹が戰つたのは達靺であるとしてゐる。これはこの時の阻卜も漢人のいふ達靺であることを語る明證である。即ち十世紀の二十年臺には達靺^{II}阻卜は漠北に擴つてゐたが、その最強部はオルホンの要地を占めてゐたから、契丹側に特にそこの戰が記録されたのであらう。又、この舊五代史の文によつて達靺^{II}阻卜の一部はこの頃も南下して、雲州即ち今日の山西大同方面の國境に近附くことがあつたことが知られる。

阿保機の九二四年の西北征は、更に沙漠を越へて今日の新疆甘肅方面迄も及んだやうに遼史は傳へてゐるが、それは怪しい。いや、阻卜自體もこの親征の結果契丹の治下に入つたのだとみることはできない。舊五代史の傳へるやうに阻卜^{II}達靺は打撃を受けたであらうが、尙契丹に對しては獨立した勢力であつたらしい。九二五年以來二八、二九、三一、三二、三四、三五年と殆ど毎年のやうに後唐國への達靺の使節の來朝が記録に残されてゐて、時にはその首領の訪問迄記されてゐるのは、この事實を證するものである。⁽³⁶⁾

達靺と支那の王朝とのかうした交渉は九三六(天福元)年石敬瑭が後唐王朝を倒して晋王朝を樹立すると共に一變した。石敬瑭は、契丹の援助を得て皇帝となつたため、所謂雲燕の地を契丹に獻じたことは名高い史實である。この結果、契丹の領土は陰山方面迄確實に延び、かくて蒙古地方の達靺と支那との直接の通路はこゝに截ち切られたのである。契丹人は達靺がその領内を通過して支那に行くのをゆるさなかつたので、この後、達靺は支那と交通するには主として黄河の

河套邊以西の、まだ契丹の力の及んでゐぬ、黨項の領域を通らなければならなかつた。九世紀の後半や十世紀の二十年臺頃の達靼と支那との交渉は今日の山西省の北部から行はれたのに、例へば九八三（太平興國八）年に支那にきた韃靼の使が夏州或は靈州といふ今日の陝西省や寧夏省方面から往來してゐるのはこの期以後のかうした事情によるのである。

黨項の勢力圈を通らなければならなかつたことは達靼に支那王朝への交通を一應躊躇させることになつた。新五代史^{參七}達靼傳には達靼がこの頃以後も「訖于顯德、常來不絕」と記してゐるが、その記載とは逆に顯德五（九五八）年に至る迄、乾祐三（九〇五）年を除いて、達靼の支那に來朝した具體的記述が、後唐王朝時代にはあれ程屢々史上にみえるのに、ばつたりと記されなくなつたのは、歐陽脩が後唐の長興頃のと顯德五年の達靼來朝の事實を以てその中間を類推し、新五代史に好い加減に「常來不絕」と概括してしまつたことを推測せしめるもので、實際は新五代史の記述の逆に近いとみるのが正しいのではないか。

契丹のかうした北支那北部への發展は達靼にも契丹の勢力を一層感ぜさせたらしく、後唐王朝の末期から晉王朝の時代を通じて阻ト韃靼の契丹への來貢が頗々と遼史に記されてゐる。かくて九四五（會同九）年には「以阻ト酋長曷刺、爲本部夷离董」といふ一見契丹の官號の授與さへ行はれたらしい記録もある^{（參八）}。ところが阻トの來貢は九四七年以後再び遼史から暫く姿を沒してゐる。Blindであると思はれる鼻骨德やウイグル、キルギスの來貢は依然書かれてゐるのに、阻トについてはその記載をみぬのは、この時期即ち九四七年頃から九七八年頃にかけての三十年程は契丹の勢力から阻トが離れてゐたことを示すものだらう。これとは逆に支那王朝の記録に九五八、六六、六九の各年に達恒（塔坦）との交渉がみえるのはこの推測を裏書きするものといへる。

しかしこの三十年間に韃靼が支那側とも餘り交渉をもち得なかつたのは交通路に難點があつた關係もあらうが、又韃靼内部で鬭争が行はれてゐたことも原因となつたのではあるまいか。遼史^{八卷}景宗紀、保寧二年の條に、

十一月庚子、臚胸河于越延尼里等率戸四百五十來附、乞
隸官籍、

とあるのがその一證である。臚胸河は周知のやうにケルレン
河である。延尼里の稱號と思はれる于越是、一見契丹の官號
于越のやうにもみえるが、前に引いた宋白の文や新五代史遼
祖傳に「有首領(新五代史無此二字)每相溫、于越相溫」とあり、これに
前引の舊五代史莊宗紀記事中の達靺の「首領于越族帳」、或
は冊府元龜卷九朝貢五清泰元年八月の條にみえる「達怛首領
沒于越等入朝」、王延德行記中の達于于越王子などを考へ合
せると、于越是相溫サグムと同じく韃靼自身がつ
てゐた稱號でもあつた。⁽³⁹⁾それ故、住地と稱號とから考へて、
この來附した延尼里は韃靼人に相違ない。おそらく部族内の
鬭争の結果その敗者たる彼が契丹に投じてきたものであら
う。又この事件は矢張阻卜が契丹の勢力外にあつたことを物
語る證據でもあるとみてよい。實際契丹はこの頃尙ホロンバ
イル方面の烏古部、敵烈部の反抗に手を焼いてゐて、それよ
り西方の地にはまだ十分力を延すことができなかったたのであ

る。

九七九(乾亨元)年になると「阻卜惕隱曷魯、夷离重阿里親
等來朝」と遼史にみえ、^(38b)阻卜の二人以上の酋長が契丹にきた
ことが知られる。これは九七三(保寧五)年頃陰山、オルド
ス方面の黨項を契丹が攻撃したことに關係があらう。^(38c)しかし
彼らは契丹に降服しにきたものではなかつたから、この後數年
たゝぬ中に契丹では阻卜攻撃が企圖された。これは九八二
(乾亨四)年に始り、九八五(統和三)年に終る間耶律速撒
を將として實行された。^(38d)

攻撃の始つた九八二年の前年は王延德が達靺及び高昌へ向
け宋領を出發した年である。彼の訪れた九族達靺は、前に説
明したやうに、當時最も有力な達靺の部族集團であり、高昌
はウイグル人の有力な國家であつた。延德が高昌に着くと當
時矢張高昌にきてゐた契丹の使者は高昌王に抗議を出した。
延德の行記にこのことを、

〔契丹使者〕謂其王云、聞漢遣使、入達靺、而道出王
境、誘王親邊、宜早送、至達靺、無使久留、

と傳へてゐる。文中の其王とは高昌王であり、漢は勿論宋朝を指し、邊を窺ふとある邊は契丹の邊境の意である。これを見ると契丹は自國と當時交戦状態にあつた宋王朝から派遣された延徳の達斡、高昌訪問を重視してゐたことが知られる。

この契丹の使者の言からでも察せられるやうに、事實宋側としては契丹を牽制し、場合によつては契丹を夾撃すべく達斡や高昌に連絡をとつたものだらう。續資治通鑑長編^{卷二} 雍熙元年四月の條の王延徳のことを書いた中に「所過蕃部皆以詔書賜其君長、襲金帶繒帛、其君長各遣使謝恩」とあるが、特に送つた詔書の内容には右の企圖が藏されてゐたに相違ない。契丹の耶律速撒の阻トハ韃靼攻撃はかうした王延徳の達斡連絡の報道によつて促されたものだらう。速撒の阻ト攻撃開始は九八二年の十二月であるが、九八一年五月に宋を發し、翌年四月には高昌に着いてゐる王延徳は速撒の攻撃開始より少くとも八ヶ月以前に達斡を通過してをり、又彼が高昌で契丹の使者と會つたのさへも少くとも數ヶ月以前であるから、宋朝の達斡との連絡の報道は當然攻撃開始よりも可成前に契丹

側に達してゐたとみねばならない。從來の九族達斡を研究したものは、かうした當時の比較的密接な國際關係を顧慮しなかつたため、王延徳の記した九族達斡の部族或は酋長名中にこの頃契丹側に知られた阻トの部族或は酋長名と殆ど同じものがあることに氣附かずゐる。そこで私はここに再び王延徳の行記の九族達斡を考察してみよう。

延徳の行記中で「九族達斡中尤尊者」と書かれてゐる達干于越王子族の于越は前にも述べたやうに達斡の稱號である。王子は、小野川氏は羌族の專用語のやうにいつてゐるが、それは誤りで、この頃のウイグルや契丹人にも存在した語で、王を意味する北方語を漢字で表現した形であらう。達干といふのは突厥、ウイグル、契丹、蒙古を始めとして北方諸族の間に屢々使はれてゐる達干、達刺干 *darqan, darqan* といふ稱號に甚だ類似してゐるが、同音のものが人名にも用ひられてゐる場合があるやうで、必ずしも常に稱號だと斷定することはできない。この場合も、于越王子が稱號である以上、むしろ人名か部族名かであるとみた方がよいだらう。これと同

じ名稱をもつ阻ト韃靼の部族或は酋長のことが遼史にみえるのは注意すべきことである。先きに述べた耶律速撒の阻ト攻撃はその後進展し、王延徳が歸國した年である九八四年(宋雍熙元、遼統和二年)年の條には次の記事が遼史〇^{卷一}聖宗紀、同〇^{卷七}屬國表にみえてゐる。

速撒等討阻ト、殺其酋長撻刺干。

これは又同書^五卷八耶律題子傳に「將兵、與西邊詳穩耶律速撒討陀羅斤、大破之」とあるものに相應する。この酋長撻刺干^五陀羅斤が王延徳の記してゐる九族達靺の「尤尊者」達干に當るとみるのは、兩者が同音の漢字表現であるばかりでなく、年代、住地、種族及び兩者の身分から考へても、十分首肯し得ることである。前に述べたやうに阻トの最強部はオルホン流域にあり、王延徳によつてそれが九族達靺であることが知られたが、速撒は阻ト攻撃開始後約滿二年にして阻トの最強部を破り、その最有力者撻刺干王を殺したのである。この結果速撒の阻ト遠征もこれでほど終り得たのである。撻刺干^五達干が殺されたのは彼が最強力な抵抗者であつたからば

かりでなく、彼が宋側と連絡をとつたことが契丹を刺激したからであらう。九八三年に宋にきた塔坦國の使者は九族達靺から送られたものとみるべきだからである。

遼史にいふ阻トの酋長撻刺干が王延徳にいふ九族達靺の達干王だとすると、延徳のいふ拽利王子族の拽利王子^(38b)を九七九年に契丹に來朝した阻トの酋長の一人阿里靺に比定しても差支へなからう。一體この時代の外國のことを記した記録には官職名とか部族名とかを以てその人名と書くことが屢々であつた。先きの達干も官職名でないとすると、人名なのか、部族名なのか問題となる。達干^五撻刺干に類似した名稱は遼史^六卷九耶律仁先傳にみえる阻ト塔里干がその一である。その記事は、

〔咸雍五年〕阻ト塔里干叛、……仁先嚴斥候、扼敵衝、懷柔服從、庶事整飭、塔里干復來寇。仁先逆擊、追殺八十餘里、大軍繼至、又敗之。別部把里斯禿沒等來救、見其屢挫、不敢戰而降、

とある。更に遼史^二卷三天祚帝紀及び同書^九卷六部族表に遼末耶

律大石が衆を率ゐて西走した時歴た諸部族名が記されてゐるが、その中に、箭内氏がオルホン河の支流タミール河畔にゐた部族だと考へられた達密里族の直前に、達刺乖といふ部族の名が書かれてゐる。これらから推すと、王延徳の行記では部族名らしく思へた達干は矢張確かにさうだつたので、達干、達刺干、陀羅斤、塔里干、達刺乖は共に同一部族を指すものとみてよい。

拽利王子族の拽利もこれと同じく部族名であつて、遼史の阿里靺は部族名を酋長名と混同したものだと思ふ。これを證するのは遼史^{四卷}太宗紀に會同二（九三八）年に來貢した阻卜の記事に「阻卜阿离底來貢」とあるものである。阿离底は阿里靺と同じであらうが、こゝでは部族名らしく記されてゐるのである。私はこの拽利、阿里靺、阿离底族は十二世紀時代にオルホン流域を占めてゐたケレイトの一部族アリアト（Aliad）に當ると思ふが、これについては別稿「モンゴル部の擡頭とケレイト部」で論じる筈である。

さて、阻卜、達紐は、速撒の攻撃を受けたにもかゝらは

ず、まだ中々契丹の勢力下に服さなかつたらしく、こゝに於て九九四（統和十二）年から四ヶ年に亘る所謂皇太妃の阻卜大征服戦が行はれるのである。この結果、阻卜は概ね契丹の勢力下に入り、これを鎮壓するために、間もなくオルホン・トラ地區に鎮州可敦城を始めとする三城がおかれ、西北招討使が軍を率いてこゝに駐するのであるが、これらのことについて又別稿「阻卜（韃靼）と契丹との抗争」で述べる筈であるから、こゝにはこれ以上觸れぬことにする。

むすび

曾てブレットシュナイダーや松井等氏が西遼の建設者耶律大石西走の道筋をエチナ河經由に考へられたのを、羽田亨、箭内互兩氏がそれはオルホン河方面經由であると改訂されたが、これと同じやうなことをこの拙論の第一節で行つたことになるかもしれない。即ち從來諸氏によつてエチナ河經由であると考へられてゐた王延徳の高昌行の道筋を私は、彼がオルドスを北行し、唐代の豐州の舊地を経てオルホン流域に至

り、それより杭愛山を越へてハミに向つたのだと、改訂したのである。この結果、王延徳のいふ九族達韃はオルホン流域を住地としてゐたもので、又小野川氏のいふやうな羌族系ではないことが明かとなつたと思ふ。

更に第二節では次のことを私は述べた。この九族達韃の前身は、八世紀にセレンゲ河下流或はその東方オノン河方面にかけて住んでゐて、Tatar 中最も進歩してゐたと思はれる、toquz tatar（九姓韃韃）であり、これが九世紀中葉のウイグルの潰散を契機として南下し、ウイグルに代つてオルホン流域を占めたキルギスを九世紀後半には壓迫して、遂にその地に進出し、更に南方、支那の政權とも交渉を持つに至つた。オルホン流域は蒙古屈指の沃地で且つ東西陸路交通路線の要地として匈奴以來十七世紀に至る迄蒙古地方の中心地であつたが、九族達韃（toquz tatar）のこの地方を占領したことによつて蒙古人の蒙古地方制覇の第一歩が開けたのである。

第三節では私は次のことを説明した。十世紀の初め契丹の阿保機の政府が確立し、その勢力がやがて西方に延び、阻卜

とオルホン流域で戦ふが、このことは當時の支那王朝の記録の傳へる韃韃と契丹との攻戦と符合し、この頃の阻卜も漢人の記す韃韃であることが證される。十世紀時代を通じて最も有力な阻卜はオルホン流域にゐたのだが、これがつまり九族達韃である。韃韃は契丹王朝に對しては受身の立場にあつたが、尙獨立した勢力であつて、支那王朝とも頗繁な交渉を持つてゐた。しかし所謂雲燕十六州の地が契丹の手に確實に入ると、支那王朝から韃韃は隔離され、支那との交渉は稀れとなる。韃韃と支那との交通はこれ以後契丹領西方外を通ることゝなるが、王延徳がオルドスを通過せねばならなかつたのもかうした情勢によるものである。契丹と交戦中の宋王朝はオルホン流域の九族達韃をして契丹を牽制させようとして王延徳を派遣したが、この結果九族達韃は契丹の攻撃を受けることゝなり、九八四年には遂にその最有力部の酋長が殺されてしまふ。この最有力部といふのが王延徳のいふ達干族であつて、契丹側の記録では達刺干＝達里干＝達刺乖などとみえるものである。又王延徳のいふ九族達韃の一の拽利族は契丹

側のいふ阻卜の阿里靉^{アライ}阿离底に當る。

私は大體以上のやうな、主として政治上のことを説明したが、この時代の韃靼が、*buyrug* や *saqun* (*Saangun*) などの稱號にみるやうに、突厥やウイグルの文化を繼承してゐること、或は九族連組の社會は單なる部族聯合の境を脱して、王延徳が九族連組の最有力な酋長が自己の子供を他部の長としてゐることを傳へてゐるやうに、十世紀時代には原始國家が成立しかけてゐたこと、かうした文化や社會上の問題は別の機會に述べたいと思ふ。

これは拙稿「蒙古人の蒙古地方の成立」の一章をなすもので、この前には「阻卜と韃靼と」[*Tatar*] がき、この後には「阻卜(韃靼)と契丹との抗爭」や「蒙古部の擡頭とケレイト部」がくる。こゝで觸れなかつた白達達の問題も遼史の拔思母 (*Bashu*) のことと關連してこの後の章で述べる筈である。 — 昭和二年四月 —

(1) 白鳥庫吉「室韋考」(史學雜誌三〇の二、三、四、六、七、八)。松井等「契丹可敦城考附阻卜考」(滿洲地理歴史研究報告第一)。箭内互「韃靼考」(滿洲地理歴史研究報告第五及び蒙古史研究所收)。小野川秀美「汪古部の一解釋」(東洋研究史二の

四)。王國維「韃靼考」(王忠懿公遺書增訂本觀堂集林卷一四によるべきで、蒙古史料校注四種本に附載されてゐる系統のものは増訂論文に比べて不備な點が多い)。王靜如「論阻卜與韃靼」(國立中央研究院歷史語言研究所集刊二の三)。馮承鈞「遼金北邊部族考」(輔仁學報八の二)。徐炳昶「阻卜非韃靼辨」(女師大學學術季刊二)。同「阻卜年表」(上掲季刊二)。

(2) 拙稿「阻卜と韃靼と」[*Tatar*] 參照。私は阻卜は契丹語であつて、尤不姑がその同音異字譯だと思つてゐる。

(3) 小野川氏前掲論文一一頁。松井氏前掲論文三二六頁。箭内氏前掲論文(蒙古史研究本)五三二、五四九、五六五頁。

(4) 王忠懿公遺書外編所收古行記校錄。王國維のこの校錄はまだ完全なものではなく、文獻通考や揮麈前錄の諸版本と照合すれば尙多くの校注を必要とするが、こゝでは紙數の關係上王國維のまゝに従つておいた。又この行記を簡略にしたものは續資治通鑑長編卷二五雍熙元年四月の條にも引かれてゐる。この行記を *Julien* が佛譯してゐることを石田杜村先生及び *P. Pelliot*, *A propos des Comans* (*Journal Asiatique*, Avril-Juin 1920) P. 148 以下つて知つたが、遺憾ながら今參照することができぬ。尙 *Pelliot*

のこの論文にも行記の九族雜組のことが若干説明してある。

- (5) 續資治通鑑長編卷二二太平興國六年五月甲寅の條及び王延德使高昌記。

- (6) (a) 續資治通鑑長編卷二五雍熙元年四月の條。(b) 宋史卷四八五夏國傳。(c) 宋史卷四九一黨項傳。

- (7) 言泥族が古豐州の地にゐたことは宋史卷四九一黨項傳、續資治通鑑長編卷五六景德元年正月己丑の條にみえてゐる。宋代の豐州は三個所あつた。一つは和田清先生の會て考察され今日の歸綏東方の白塔の地とせられた遼の豐州天德軍。一つは唐代の豐州で、當時古豐州とよばれたもの、今日の後套の内にあつた。今一つは宋朝所屬の豐州で、これは府州(現陝西省府谷縣)の西北二百支里、つまり今日のオールドスの東北部にあり、黨項族の住地となつてゐた(續資治通鑑長編卷二四寶元二年八月の條)。

- (8) 松井氏前掲論文三二一六頁。箭内氏前掲論文五三一頁。小野川秀美氏「蒙古史・中世」(支那周邊史上所収)四二二頁。

- (9) 松井氏前掲論文三二〇頁。田坂與道氏「漠北時代に於ける回紇の諸城郭に就いて」(蒙古學報二)二〇二頁。P. Pelliot 博士掲論文に於て松井氏の説を是認してゐる。

- (10) (a) 小野川氏前掲論文二一頁。(b) 田坂氏上掲論文同頁。

- (11) 舊唐書卷一九五迴紇傳、(a) 新唐書卷二二七下回鶻傳、文獻通考三四七回紇。

- (12) 宋史卷四九〇回鶻。宋會要蕃夷七歷代朝貢及び蕃夷四回鶻の條にもほゞ同文が記されてゐるが、文字に二三の違いがある。舊五代史卷五三李存信傳にも合羅川なる地名がみえるが、これは雲中の合羅川で、遼末耶律大石の西走の際通過した黒水に當らう。羽田亨氏はこの黒水を今の内蒙古茂明安の喀喇木倫に比定された(西遼建國の始末及び其の年紀)史林一の二二頁。尙、岑仲勉の「外蒙於都斤山考」(歷史語言研究所集刊八の三)三六八頁によれば、彼は「合羅川攷」を著したらしいが、まだ題目せず、それが印刷になつたかどうかもしらない。御教示を請ふ。

- (13) 元朝のハラ・ホルム市は蒙古文與元關碑には Korum と書いてある。又元史百官志や地理志にみえる哈刺和林河は歐陽圭齋文集卷一一所收の高昌便氏家傳には和林河となつてゐる。即ち共に Kara 地方の Korum 市とか Korum 河とかを意味し、合羅川とはこの Kara 地方に當ると解するのである。

- (14) 蒙古游牧記卷七土謝圖汗部及び水道提綱卷三三鄂勒昆河の

條。(a) スミルノフ、播磨楢吉譯「外蒙古の温泉と礦泉」(善隣協會調查月報六九) 七六一七九頁。バンバーエフ、播磨楢吉譯「オルホン河畔に古蹟を訪ねて」(蒙古八の九) 七六、七七頁。

(15) 新唐書卷四三下地理志所引による。中受降城については和田先生「豐州天德軍の位置について」(史林一六) 一九六頁。

(16) (a) 新唐書卷二七上回鶻傳、舊唐書上掲廻紇傳。文獻通考回紇傳は新唐書による。(b) 元和郡縣圖志卷四〇、隴右道下。

(17) (a) 華北から和林への元朝の驛路には帖里干道と木鄰道の二路があつた(永樂大典本站赤六泰定元年三月一日の條參照)。

その詳細は省略するが、他日論する機会を得たいと思つてゐる。

(b) 長春道人西遊記卷上。尙又王延德の通過したコースは耶律大石の西走時の道筋をも想起させる。この道筋はブレットシユナイダーや松井氏によつてエチナ河を通過するものを考へられたが、後、羽田氏及び箭内氏によつてその誤りが指摘され、陰山方面からオルホン流域を経由して北庭に出たものと定められた。

(18) (a) 小野川氏前掲論文八頃、箭内氏前掲論文五三一頁、

(b) 小野川氏同上及び九頁。

(19) これについては註(7)にあげたものゝ他種々な史料があるが、長編卷五四咸平六年正月丙午の條に豐州管下の黨項族の陸伊克美克部の住地を記して「在黃河北、廣袤數千里、族帳東接契丹、北隣達靼、南至河、西連大梁小梁族」とあるのは注意すべき記録である。大梁小梁とは大涼小涼族とも書き黨項族である。これによつても黨項と韃靼とは明かに區別されてをり、又咸平六年即ち一〇〇三年頃の韃靼は陰山五原方面に住した黨項族の北にゐて、けつして西にゐたのではないことを知る。

(20) 舊唐書卷一八上武宗紀會昌二年八月の條、新唐書卷二一七下回鶻傳、資治通鑑卷二四六會昌二年八月。

(21) W. Barthold, 12 Vorlesungen über die Geschichte der Türken Mittelasiens, Berlin 1958. P. 97 所引 Divân İğhat at Turk. この書は小林高四郎氏より教示、貸與を受けた。C. Brockelmann の Mahmūd al-Kāschghari über die Sprachen und Stämme der Türken im XI. Jahrh. (Körsi Oromas Archivum 1) には「Tatar が支那の近くにあること」がみえてゐる。(S. 36)

(22) 拙稿「阻卜と韃靼と「Tatar」參照。至元譯語や元朝祕史で

は Monggul の漢譯は達達となつてゐるが、元興章九史部三「投下達魯花赤」の條にみえる達達のものに Monggul の譯字がない場合があるから注意されたい。

- (23) 例へばインヂヤナシイの書いた *Yekke yuvay un mandayan türi yin küke sudur* 《大元勃興の青史》の首章や第七章。

(24) 拙稿「阻卜と韃靼と Tatar」で詳かに論ずる筈である。

- (25) 主として W. Radloff, *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*, St. Petersburg 1895. 小野川秀美氏「突厥碑文譯註」(滿蒙史論叢四) 及び Yazan, Eski Türk Yazıları, 1, Istanbul 1936. を參照。こゝに引例した(1)の文中の *bakli* を高句麗とみる岩佐精一郎氏の高説(岩佐精一郎遺稿所收「古突厥碑文の Bakli 及び Par Furm に就いて」)には次の *solge* との續き具合からしてまだ完全な賛成はできない。*solge* は小野川氏は不明の言葉としてゐるが、私は十三・四世紀の蒙古語碑文に於ける *solge* の用例から考へて(拙稿「元朝行省の成立過程」史學雜誌五六の六の五七九頁)州として譯してみた。尙、P. Pelliot *Notes sur le "Turkestan" de M. W. Barthold* (*T'oung Pa* 〇。

XXVII) P. 18. 參照。

- (26) G. J. Ramstedt, *Zwei uigurische Runenschriften in der Nord-Mongolei*. (*Journal de la Société Finno-Ougrienne* XXX) 及び Yazan 前掲書參照。王靜如の「突厥文回鶻英武威遠毗伽可汗碑譯釋」(輔仁學誌七の二、二六期)のこの碑文の翻譯は Ramstedt の獨譯からの重譯といつてよく、原文からは大分離れてゐる。こゝに引用したものは碑文の東面第一から第七行に互る部分 *toquz yäq* (Ramstedt, s. 16-21. Yazan, s. 166-170) 尙 *toquz tatar* はこの他西面第八行にも記されてあつたやうである。又 *Tatar* がウイグルの東にゐたことは東面第八行からも察せられる。引用文中 *bas* は泉ではなく山と譯すべきかもしれない。かうした細かい問題は幾つかあるが、紙數の關係上省略する。

- (27) (a) 小野川氏「突厥碑文譯註三七八頁」。(b) *Oguz* の問題は未解決な點が多い。最も研究されてゐる *toquz Oguz* (九姓鐵勒) である、羽田氏「九姓回鶻と *Toquz Oguz* との關係を論ず」(東洋學報九の二)、橋本增吉氏「九姓回鶻の問題に就いて」(史潮三の二)、小野川氏「鐵勒の一考察」(東洋史研究五の二)などの論文があるにもかゝらず、再檢討が必要である。例へば

十二月。

九姓鐵勒を構成してゐるのは何部であるかといふ初步的な問題さへ解決されてゐない。これについては私は羽田氏や橋本氏の説と異つて、唐會要記載の九姓の一である骨齒屋骨は舊・新唐書の俱羅勃¹掘羅勿であり、又舊・新唐書地理志にみえる多覽葛、奚結、阿跌は突厥九姓で、單なる九姓鐵勒には入らぬと考へてゐる。かうした九姓鐵勒の諸問題については別に稿を草したい。

(28) (a) Ramstedt 前掲論文 S. 50. (b) 同論文 S. 45. 共に王靜如の前掲「毗伽可汗碑譯釋」の藍史鐵氏校註譯錄參照。

(29) 王國維「韃靼考」(增訂本)。小野川氏「汪古部の一解釋」一三、二六頁にも王氏の説は「臆說の域を脱せず」といつてゐる。

(30) (a) 王靜如前掲「毗伽可汗碑譯釋」二二三頁。(b) 小野川氏「突厥碑文譯註」三七九頁。

(31) 白鳥庫吉先生「室韋考」一六七頁。王國維「黑車子室韋考」(觀堂集林一四)。室韋については詳記を暫く避けたい。

(32) (a) 舊唐書迴紇傳。新唐書回鶻傳下。資治通鑑卷二四八唐宣宗紀大中二年正月。(b) 舊唐書卷一八下宣宗紀。資治通鑑同上大中元年六月。新唐書卷一一七下黠戛斯傳。冊府元龜卷九六五封冊三。(c) 新唐書同上。資治通鑑卷二五〇唐懿宗紀咸通七年

(33) (a) 資治通鑑卷二五三唐僖宗紀廣明元年七月。舊唐書卷一九下僖宗紀。舊五代史卷二五後唐武皇紀上。同書卷五五康君立傳、薛志勤傳。新五代史卷七四韃靼傳。(b) 舊五代史同上。資治通鑑卷二五四唐僖宗紀中和元年二月。尙新五代史同上及び舊唐書同上參照。資治通鑑所引の宋白の韃靼の記載はおそらく續通典の遺文一によればこの兵は韃靼の二相溫(將軍)に率ゐられてゐた。

(34) 遼史卷一四聖宗紀統和三年六月の條に「達旦國九部遣使來聘」とある。この達旦がオルホン流域近くにゐたことは同書卷一五聖宗紀開泰二年正月の條に「達旦國兵圍鎮州、州軍堅守、尋引去」とあることからでも知られる。鎮州はウゲイ・ノール畔の鎮州可敦城である。

(35) 田坂氏前掲論文二〇一頁。松井氏前掲論文三〇一頁。(a) 松井氏同上。

(36) このことを知るのは王國維「韃靼考」附載の表が便利である。(a) 冊府元龜卷九七二朝貢五。同書卷九七七降附。舊五代史卷四〇明宗紀。

(37) 續資治通鑑長編卷二四。西夏が河西地方に覇權を確立してか

らは、支那王朝と韃靼との連絡は更に西方を迂回し今日の新疆省の東邊から青海を經由して行はれた(例へば續資治通鑑長編卷三四七元豐七年七月戊申の條參照)。

(38) (a) 遼史卷四太宗紀。(b) 同書卷九景宗紀。(c) 同書卷八景宗紀。同書卷七○屬國表。同書卷九四耶律速撒傳。(d) 同書卷一○聖宗紀。同書上掲屬國表。同書卷八五耶律題子傳。同書卷八八蕭排押傳。

(39) 相溫は突厥の官號 *šangnu* 例へばエニセイ碑文をみよ一の系統を引くもので、ウイグルでも用ひられてゐた。これを支那では將軍と譯してゐるが、元來突厥の *šangnu* は將軍なる支那語を輸入したものらしいから、この譯は正しいわけである。*šangnu* は契丹にも傳り、敍穩、常袞、辛亥などと書かれてゐる官名はおそらくこの系統を引くものと考へられる。ヂンギス汗以前のモンゴル部の統一者の一人であつたアンバガイ汗の父想昆必勒格の想昆 (*šangnu*) (元朝秘史卷二) も相溫と同じ。この相溫と同じく、于越も亦突厥やウイグルから韃靼にも契丹にも傳つた稱號で、けつして契丹獨自のものではない。これは *buynuq* (梅録) の *u* を弱めた形の異字音譯であるかも知れぬ。韃靼の于越の *u* も

子であつて干でないことは續資治通鑑長編卷七乾德四年六月の條に「塔坦國王娘子及宰相允越皆來修貢」とある允越が于越にあたることとみられることからでも察せられる。*buynuq* はこの後十二世紀時代の蒙古人の間にも用ひられ、例へばラシイドの記してゐるケレイト王にはマルクス・ブイルク、タタル王にはナウル・ブイルクがあつた。一體契丹には職官に於ても突厥やウイグルの影響が強いことを從來見逃して過ぎてゐた。本文で後述する達刺干もこの一例である。

(40) (a) 小野川氏「汪古部の一解釋」九頁。(b) 當時ウイグルに王子なる稱號を用ゐた一例をあげれば宋會要蕃夷四回鶻、端拱元年九月の條に「回鶻都督石仁政・摩羅王子・邈擊王子・越翻黃水州巡檢四族並居賀蘭山下、無所紆屬」とあり(文獻通考卷三四七回鶻傳等參照)、契丹の例としては舊五代史卷一二三七契丹傳にみえる舍利王子などそれで、これらは王の子をいふのではない。

この小論で明かにした八世紀より一四世紀に至るオルホン地域通過の東西交通路の隊商ルートとしての意義については拙著「蒙古高原史」(刊行豫定)に述べておいた。